第3回富山市総合計画審議会「人材・暮らし部会」 議事録

日時　令和8年8月 20 日(木)10:00～12:00
場所　:富山市役所東館8階大会議室
出席者:(順不同)

石田	圭市郎	富山市 PTA 連絡協議会　会長
石動	瑞代	富山短期大学幼児教育学科　教授(部会長)
稲場	景子	富山市保健推進員連絡協議会　会長
品川	祐一郎	公益財団法人富山市スポーツ協会　会長
舘井	潔	公募委員
宮口	克志	社会福祉法人富山市社会福祉協議会　会長

企画管理部	中田次長、山口次長、堀企画調整課長、 西野主幹、中田課長代理、八木主査
福祉保健部	大野次長
こども家庭部	沼崎次長
市民生活部	豊島次長
病院事業局管理部	澤野次長
教育委員会事務局	大窪次長

欠席者:

彼谷	環	富山国際大学子ども育成学部　教授
舟坂	雅春	公益社団法人富山市医師会　会長

議事内容:

1.　開会
2.　部会長挨拶
3.　議　事
(1)基本計画(素案)「分野別の政策」について
4.　閉会

【意見交換】

＜概要＞

- **結婚・出産・子育て**

委員　　全分野共通の事項として、4ページ「現状と課題」のデータ候補について意見を述べる。

①については、人口減少に関するアンケート調査にあった「出会いの機会がない」と感じる未婚者の割合を基準値及び目標値として設定するのが一番よいと思う。②については、現在記載されているデータよりも、富山市民意識調査における出産・子育て環境の充実度に関する設問について、「そう思う」又は「どちらかといえばそう思う」と回答した割合を目標にすると、この項目の趣旨をカバーできると思う。③については、記載されている「子育て支援センター等の利用者数の推移」でよいと思う。④については、富山市こども計画の成果目標にある「企業・団体等が行う子どもや子育てにやさしい取組の市への報告件数」を設定すればよいと思う。現在は「児童虐待相談件数の推移」と記載されているが、この増減をもって良否を評価することはできないと思う。

また、他分野にも関わることであるが、4ページ下部に記載されている「取組の進捗を図る主な指標」という文言については、「図る」ではなく「測る」という字ではないかと思う。指標によって物事が進むわけではなく、取組によって進むものであるため、ご検討いただきたい。前期基本計画は5年間の計画であるため、ぜひ有意な目標を立てていただきたい。

委員　　文字表記については、今後修正されるものと思う。掲載するグラフやデータをどのようにするかは、非常に大事な問題であると思う。

委員　　気になった点として、3ページの取組の方向性に「若者の出会いから結婚、子育てまでを切れ目なく支え」と記載されている。一方、6ページの政策2では「妊娠・出産・子育てを切れ目なく支える」とされており、「まで」が付かない表現になっている。結婚・出産・子育ての分野であるため、「子育てまで」という表現では、受け取り方によっては子育てまでしか支えてくれないのかと捉えられることもあると思うため、ご検討いただきたい。

委員　　そもそも論になるが、人口減少対策をプロジェクトとして掲げるたことから、分野の順番も1番に「結婚・出産・子育て」としたと理解していた。しかし、人口減少対策をあまり前面に出さないという意見が出たのであれば、前回はこの順番でよいと思ったが、「結婚・出産・子育て」という政策の順番や、分野別の順番が本当にこれでよいのか、もう一度検討した方がよいのではないかと思う。

前回の話では、人口減少対策、特に少子化対策を富山市が大事に捉えて

いることを前面に出すという意味で、結婚・出産が最初に来ることでよいと思った。ただし、そうしないのであれば、むしろ「こどもまんなか社会の実現」のような考え方が先に来ることも考えられ、全体の考え方が変わってくるのではないかと思う。今回、表現が限定的に変更されたようであるが、結婚・出産に関するデリケートな問題については前回も意見が多かったと思うため、この分野の表現の仕方にも共通することとして、再度検討いただければと思う。

委員　　4ページ②の図の下の文に「一方、各段階の連携にはまだ課題があります。」とあるが、その課題が何なのかを聞かせていただきたい。

こども家庭部次長　　富山市では、妊娠期から母子健康手帳を配付し、伴走支援を実施しており、出生後には、予防接種や定期健診を行っているが。その中で 4 歳児・5 歳児検診の実施に関する要望や、予防接種に関しても医師会からインフルエンザワクチンなどの拡充に関する要望をいただいており、拡充策を検討しているところである。こうしたことを市民ニーズ・課題として認識している。

委員　　「まだ課題があります」という記載のみで、抽象的であるため、先ほど説明のあった内容を具体的に記載することはしないのか。

事務局　　総合計画であるため、ある程度は方針としてこのような形で記載し、細かい内容については各施策や個別の計画で位置づけていきたいと思う。

委員　　5ページの政策1「出会い・結婚の希望を叶える支援の充実」について、記載内容はもっともであるが、具体性が必要であると思う。富山市特有の政策、施設、制度などを織り交ぜ、市民に浸透しているものはぜひここに落とし込み、分かりやすく書いていただきたい。

施策1「若い世代の経済的負担の軽減」について、市が取り組んでいるのであれば、きめ細かく実施していると思うため、その文言を入れてはどうか。また、5行目の「市の施策を分かりやすく整理し、周知を図ります。」という表現は行政的であるため、「育さぽとやま等で情報発信を図ります。」とするなど、市民や若い人たちの目線に合わせていただきたいと思う。

施策3「出会いの場の創出、結婚支援」について、婚活イベントを開催するだけでなく、県のマッチングアプリもあるため、婚活イベントの開催及び県のマッチングアプリ利用者登録促進を記載してはどうか。また、「出会いの場の創出を図ります」という文言の後に、企業同士が連携した若者の交流イベントの開催を行う旨を入れてはどうかと思う。これは前回のプロジェクトのところに書いてあり、見落としている部分ではないかと思う。

また、「交際から結婚に至る過程でのサポートなど、結婚の希望をかなえられるように支援します。」という文言について、ここまで今の若者が求め

ているかどうかは疑問であると思う。そのため、「イベント事務局では交際のサポートを行います」という表現にとどめてはどうかと思う。

委員　　総合計画という性質はあるが、具体的にイメージできないという話や、全体会の中でも出ていた市民目線、市民に分かりやすくという話も出ていた。舘井委員のご意見は、そのような視点からのものであると思う。

委員　　富山市が既に取り組んでいるものとして、政策2施策1「妊娠期から子育て期の切れ目ない支援の充実」の2つ目に、「富山市妊娠子育て応援企業の増加を推進します。」という文言を追加していただきたい。これは現に取り組んでいるものである。また、施策1の5つ目にある「LDR室」という文言は、市民が分かるものではないと思うため、簡単な説明が必要であると思う。

施策2に記載の「病児・病後児保育」について、富山市は製造業の職場も多いため、事業所内の保育所にもっと取り組んでいただきたいと思う。こうした内容を加えてはどうかと思う。

政策3施策2「親子で楽しめる場の創出」について、「各児童館」や「とやまこどもプラザ」などでという言葉をいれてはどうか。施策3「ひとり親家庭への支援」については、「JOB活とやまによる」という文言を追加していただいてはどうかと思う。

8ページ政策4施策1「「こどもまんなか社会」の実現」について、「意見を聴く」とあるが、どのように聴くのか分かるように、アンケートや直接対話などを通じて聴くと記載してはどうかと思う。施策2「地域の子育て環境の充実」については、放課後児童クラブ以外に子ども会もあるため、その文言を記載していただきたいと思う。また、「地域や関係機関と連携」とあるが、「学校運営協議会が中心となり」という文言を入れると、どのように連携するかが分かるのではないかと思う。

委員　　具体的に実施している事例や、実際に行っている取組についての意見であったと思う。実際のニーズを踏まえて入れるとよい内容については、指標も含めて今後検討されることだと思うので、ぜひ参考にしていただきたい。

- **教育**

委員　　全体的に、現在の課題や教育についてしっかりまとめていただいていると思っており、ありがたい。細かい点として、11 ページ政策1の施策2「安全・安心で質の高い教育環境の整備」の4つ目に、「適切な改修により施設の長寿命化を図り、体育館に空調設備を整備」とある。学校によっては体育館だけでなく、さまざまな優先順位が変わるところもあると思うため、

体育館だけを記載することが適切であるのか。ご検討いただきたい。

12 ページ施策1「学校・家庭・地域との連携・協働と開かれた学校づくり」に「学校運営協議会を設置し」とあるが、すでに設置が進んでいるため、あえて「設置し」という表現にする必要があるのか、他の表現があるのではないかと思った。

また、施策3「家庭教育支援の充実」の2つ目に「家庭教育に関する情報交換や学びの機会を提供します」とあるが、ここは「学び」のところに「親」を入れ、「親学び」としていただけないかと思う。県でも市でも親学びに非常に注力しているため、できればそのように表現していただきたい。

つづいて、分野3について、分野のタイトルは「健康・医療・福祉」という並びになっているが、政策は、「健康、福祉、医療」の順番となっており、整合がとれていない。この分野の中では、医療についての記載は、福祉に比べると少ないように見受けられ、福祉に注力しているように感じる。そのため、「健康・福祉・医療」という順番にした方が、読み進める中で理解しやすいのではないかと思う。

委員　先ほど体育館の空調設備についての話があったが、体育館は防災上の避難場所としての役割を果たすだけでなく、スポーツ協会の立場から見ると、地域住民や企業の方々がスポーツを「する・みる・ささえる」なかで、「する」の場としても期待されている施設である。近年の温暖化・冬の寒さを踏まえると、空調設備の整備は競技スポーツの振興や健康スポーツの普及などから重要であり、今後の施設整備に期待したい。

また、部活動の地域連携・地域移行について、スポーツ協会としては、地域の方々の協力を得ながら競技人口の拡大や選手育成を進めている。学校が主体となって運営していただくことは大変ありがたいが、難しい場合には、地域との連携を進めるために行政が旗振り役となることを期待したい。

現在は競技ごとに、クラブチームが主体的に取り組む競技とそうではない競技があり、対応に差が生じている。そのため、全体を統括しながらコントロールできる仕組みや体制の整備が必要であると思う。

ジュニアチームなどでは、競技力向上のために人が集まり、強化が進むこと自体は望ましい。一方で、スポーツの裾野を広げるという観点では課題もある。例えば、サッカーや野球、バスケットボールをやりたくても、高い競技レベルを求められることで参加しづらい子どももいると思う。スポーツの普及促進という観点から、競技力向上と普及のバランスを図る機能についても期待したい。

12 ページ施策2「地域とともに子どもが育つ環境づくり」について、最

近、社員と話をしていると、0歳から3歳頃までの子育て支援体制は整備されつつあるものの、フルタイムで働きながら小中学生を育てることは非常に大変だという声を聞く。職場の先輩たちの様子を見て、「2人目の子どもを持つことをためらう」「仕事を辞めようかと考える」といった話もあるようである。

父親・母親が共にフルタイムで働く中でも、小学生や中学生が放課後に宿題に取り組み、食事を取り、習い事や文化・芸術活動にも参加できる環境を整えることが重要ではないかと思う。そのような理想像から逆算して施策を考える必要があるように感じている。

先日、まちづくり推進課のイベントで講演を聴講した際、近年増えている事例として、祖父母が中心市街地に住み、学校が終わった孫を迎えに行って自宅で預かり、宿題や食事を済ませ、その後、仕事を終えた親が合流し、一緒に夕食を取った後に自宅へ帰るという生活スタイルが紹介されていた。富山市内でもそのようなケースが増えているとのことである。

本日の議題からは外れるかもしれないが、中心市街地活性化という観点からも、子育て世帯を支える機能の充実は重要であると思う。例えば、少子化の影響により産婦人科やレディースクリニックの経営が厳しくなり、後継者不足で閉院する事例も出ている。その結果、「どこで出産すればよいのか」という不安も生じていると聞いている。

そこで、まちなかにバースセンターのような産婦人科施設があり、そこに保育施設、学童保育施設などを整備し、祖父母世代が若い世代の子育てを支援できるような施設をまちなかにつくるという考えも必要ではないかと思った。

委員　教育分野について、目標値は 10 ページに記載のデータ候補をもとに設定していただければと思う。教育の分野については、比較的具体的にさまざまな内容が書かれており、子どもや色々な現実と向き合い、仕事しておられる現れだと思う。

希望を2点申し上げると、12 ページ政策2施策2「地域とともに子どもが育つ環境づくり」について、富山市では「14 歳の挑戦」という素晴らしい取組を行っている。中学校によっては、100 を超える企業、職場、団体等が協力し、子どもを育てる取組であるため、その成果報告を地域にも行ってはどうかと思う。学校内での報告、受入れを行った企業・団体への報告などは行っていると承知しているが、地域にも、多くの企業・団体が協力し、地域の皆さんの協力によって子どもが成長したことを伝えるとよいと思う。

続いて、施策3「家庭教育支援の充実」について、「相談体制を確保し」と

記載があるが、各子育て支援センターが中心となるということではないかと思う。13 ページ政策3施策2「インクルーシブ教育の推進」については、「国際交流活動」に、富山市国際交流センターを拠点として行う旨を入れていただければ、具体的な内容が少し分かりやすくなると思う。

14 ページ政策4施策1「リカレント教育の推進」について、富山市職業訓練センターを拠点として、社会人への学びの機会を運用するというところで、せっかくある施設を改めて市民に認識してもらい、推進していくことが必要ではないかと思う。

委員　13 ページ施策1「学校に行きづらいと感じている子どもへの支援」について、「古志はるかぜ学園」に関する言及があるが、富山市としては、「古志はるかぜ学園」に通うことだけでなく、校内にサポートルームを設置したりなど、子どもたちが地元の学校へ行きたいと思える学校をどのように作っていくかが目指す方向ではないかと思う。柔軟なカリキュラムによる教育を提供することは間違いないが、その考え方を市内の先生方が共有し、すべての子どもが学校へ行きたいと思える教育環境を整えることが大切であることを含ませたほうがよいのではないかと思った。

また、保護者への働きかけも非常に重要であると思う。スマートフォンやSNSをやめることによって、子どもたちが学校に気持ちを向ける環境を作ることができ、2週間で不登校の9割が改善するという話もある。

生成AIをどう使っていくかということも重要である。SNSの問題、生成AI、特殊詐欺なども含めて、情報リテラシーが非常に重要になっていると思う。これは学校教育だけの問題ではなく、保護者や地域の大人、企業も含めた問題であると思う。

大人の中にも、バスの中やバス停、歩行中や、禁止されているにもかかわらず自転車の運転中にスマートフォンを見ている人が多く、依存症のようになっていると感じる。企業は利用者を増やすために努力しているため、それに対する警戒感をしっかり持たなければならないのではないかと思う。子どもだけでなく、大人、地域、企業も含めて、しっかり対応していく必要があると思う。

小児生活習慣病があるが、昼夜逆転した生活が影響している部分もある。こうした課題に対して、富山市としてもしっかり対応していく必要があるのではないかと思う。総合計画に記載するのか、次の個別計画に位置づけるのかは検討する必要はあるが、課題として認識し、取り組んでいく必要があると思う。

委員　政策2の学校・家庭・地域で支え合う教育には、盛り込むべき内容がさまざまにあるように思う。

委員　　先ほどの部活動の地域移行について、部活動は教育の一環であることが望ましいと思っている。一方で、大きな政策の流れとして地域移行が進む中、競技スポーツの関係者には、上手な子を重視し、そうでない子への関わりが弱くなる傾向もあるように感じる。

地域移行後の担い手となる方々の中には、教育に関する講習を受けていない方もいると思う。そのため、受け皿となる競技団体、スポーツ団体、クラブチームの運営者やコーチ、指導者に対して、教育者としてあるべき姿や心構えなどを学ぶプログラムを用意していただけるとよいと思う。円滑に地域移行を進めるために、指導者教育的な観点が必要であると思う。

また、教育のDXについて、企業で採用活動をしている中でも、最近は就職活動を支援する事業者の多くがインターネット経由であり、学生に与える影響も大きいと感じている。若者の精神的な不調や自死が増えていることについては、SNSの悪影響があるという話も聞いており、自分もそのように感じる。

一方で、海外の一部の国のように利用を禁止すればよいということでもなく、日本では難しいと思う。悪影響を認識しつつ、これからの情報化社会では共生していくことが必要となるため、そうした社会で育っていく子どもたちに対して、悪影響のあるものは抑えつつ、必要な教育をしっかり行うことが重要であると思う。行政にも、真正面から向き合っていただきたい。

東大の池谷先生の講演を聴いたところ、小中学生の教育においても生成AIを正しく使えば、1人学習を非常に効率的に進めることができ、答えを書かせるのではなく、採点させる使い方がよいとのことであった。生成AIを活用することで、放課後学童の問題なども、プログラムの工夫により一定程度解決できるのではないかと思う。生成AIとの共生と、SNSの悪影響については、今後の教育において重要な課題であると思う。

- 健康・医療・福祉

委員　　16 ページに記載の目標値については、①では健康な高齢者の割合を一つの目印にするとよいのではないかと思う。65 歳以上の高齢者で、介護保険の要介護・要支援の認定を受けていない人の割合が、大きな指標になるのではないかと思う。

②については、「自殺者の年次推移」がよいのではないかと思う。社会などのさまざまな矛盾や課題が集中的に現れるところであるため、この指標でよいのではないかと思う。

③については、「一般就労への移行者数」のがよいのではないかと思う。

④については、救急搬送の推移が示されているが、これがよいのか悪いのかは判定しがたいところがある。私の案としては、「要支援・要介護認定者に占める地域密着型サービス利用者の割合」を目標にしてはどうかと思う。地域密着型のグループホームや小規模のデイサービスなど、地域で最後まで暮らしていきたいという願いや政策の方向性を踏まえると、このあたりを目標にするとよいのではないかと思う。

まず 17 ページ政策1施策1「将来を見据えた健康づくりの強化」に記載の「市民へ望ましい食生活や運動習慣等の知識普及啓発」については、保健所が中心となるのではないかと思う。

また、「企業や地域と連携し」の間に、各種健保が入るのではないかと思う。施策2「子どもの健康づくり」の「保護者や学校などの関係機関と連携し」については、どのように連携するのかという点で、学校運営協議会を通じて連携すると記載すると、より明確になるのではないかと思う。

18 ページ政策2施策1「課題を抱える市民への包括的支援体制の整備」について、1つ目は、どこが中心になるかという点で、文頭に「地域包括支援センターが中心となり」を追加するとよいと思う。2つ目の「アウトリーチ等の支援を通じて」については、中心は保健所ではないかと思う。3つ目の「地域や社会への参加支援」については、中心は市役所福祉政策課ではないかと思う。

施策2「認知症の人を支える地域づくり」については、老人クラブ・老人福祉センターをはじめとして、社会参加の場を確保するという場が設定されていると思う。施策3「精神保健福祉対策の推進」については、2つ目のところが、保健所が中心となり、各関係機関と連携しているのではないかと思う。

施策4「自殺対策の推進」について、3つ目は心の健康の課題を抱えた方に関する内容であり、保健所が中心となるのではないかと思う。また、2つ目に「ゲートキーパー」という用語が出ているが、市民にはあまり知られていないと思うため、何らかの説明が必要であると思う。

19 ページ政策3施策2「高齢者の社会参加と生きがいづくりの推進」について、2つ目は、既存施設である富山県いきいき長寿センターと連携すると記載するとよいと思う。

20 ページ政策4施策2「在宅医療・介護の連携推進」について、1つ目は地域包括支援センターで行うものではないかと思う。2つ目は「関係団体が集まり」と記載されているが、目的として「地域包括ケアシステムの確立に向けて」という内容を入れるとよいと思う。また、4つ目の「相談窓口や

情報誌」については、地域包括支援センターが中心となるという具体性を盛り込んでいただきたいと思う。

委員　　具体的な組織名が記載されているものと、そうでないものがある。別のところで、担当者のような形で出てくるところもあるのか。

事務局　　これまでの計画は具体的に記載している部分もあったが、今回の計画は方向性を示すという考え方で整理している。一方で、具体的に記載した方がわかりやすい場合があるかどうか、いただいた提案を踏まえ、どの程度まで盛り込むかを検討していきたいと思う。

基本的に総合計画は方向性を整理するものであり、そのほかに個別計画等があるため、そちらと連携して進めていくことになると思う。個別事業については、実施計画の中で示すことを考えている。

委員　　18 ページ施策4「自殺対策の推進」として、支援者の育成や「若年層のゲートキーパーの養成」といったことが書かれており、これはよいことだと思う。富山市の子どもたちは1人1台端末を持っており、端末上に相談に繋がるボタンがある。これを押すと教育センターにつながり、誰に相談したいかも含めて相談できるシステムがある。

ただし、そうした環境を整えれば、すべての相談者の問題が解決するとは考えていない。まず、相談しようというエネルギーが本人にあるかどうかである。相談に対応できる支援員がいることは非常によいが、学校教育や家庭における大人との信頼関係や、困ったときに相談できる人がいると子どもたちが思っていることがベースにないといけない。

例えば保健所へ相談に行けばよいということになるとしても、保健所へ行こうというエネルギーが本人になければ相談につながらない。そのため、どのように書けばよいかは難しいが、連携や教育の場において、そうした相談につながる力を育てることが必要ではないかと思う。

施策そのものに問題があるということではないが、相談したいという気持ちをどう育てるかが重要であると思う。結婚についても同様で、希望している方をサポートすることは分かるが、そもそも結婚したいという思いがどうすれば生まれるか、結婚は大変だが楽しいということをもっと前面に出していくことも必要ではないかと思う。

教育分野でも、大変な面ばかり報道されることが多いが、本当はよい面もあると思う。そのようなアピールも、富山市として積極的に行っていくとよいのではないかと思う。

委員　　健康・医療・福祉の基本についても、寄り添うということが話題になっていたと思う。困ったときに助けてくれる人がいるということや、困ったときにも自分から助けを求められない人に対してどうするのかという点が、昨

年も話題になっていたように思う。同じような視点からの意見であったと思う。

● **スポーツ**

委員　　21 ページに記載のスポーツを「する、みる、ささえる」、そして「つながる、あつまる」という取組の方向性について、網羅的で充実した内容にしていただいていると思う。追加でお願いすることは特にない。

横断的な取組の部分となるが、プロスポーツチームを支えるということは、まちづくり、にぎわいづくり、観光、公共交通の利用促進などさまざまな分野に関わってくると思う。単にスポーツ振興ということにとどまらず、分野横断的な取組に繋げてほしい。

具体的には、サッカーのJリーグにおいてカターレ富山がJ1に上がれば、アウェイのサポーターが 1 万人単位で富山に来訪し、まちなかで楽しみ、その様子をSNSで発信することも考えられる。そのようなチームが来ることで、非常に大きな経済効果や情報拡散効果がある。まちづくり、地域の誇り、シビックプライドということにもつながっていくと思う。

また、富山市出身のNBA選手である八村塁選手についても、将来は富山グラウジーズで選手生活の最後を過ごしたいという発言がSNSで話題になっている。こうしたことかもわかるように、スポーツの振興は地域の活性化にもつながるものである。

藤井市長の選挙公約にも「スポーツを中心としたまちづくり」が掲げられていたが、重点推進事項の中に「まちづくりとスポーツ」に関することを入れてもよいのではないか。

委員　　分野横断的な視点について意見をいただいた。スポーツが他分野も含めてどのような効果を生み出しているかは、本来、市民にPRしたい部分でもあるが、どのように進めるかは難しいところがあると思う。今言われた交流人口などについて、以前はプロジェクトの社会増のところに書いてあったと思うが、何らかの形で活かせればよいと思う。

どうしても分野別に分けてしまうと、その分野の事業効果だけになってしまう。今回、市民目線で 10 年後にこのようになりたいという姿を前面に出しているため、変化を実感できるようなデータがあればよいと思う。それが次回また出てくるのではないかと思う。

委員　　22 ページに記載の目標設定について、ここに書かれているデータ情報はいずれも重要であると思うが、代表的なものを見ると、①については「成人の週1回以上の実施率の推移」がよいと思う。先ほども話があったが、健康にもつながっていくと思う。

②については、今後スポーツを盛り上げていこうという中で、2つ目の「地域のプロスポーツの観戦意向」は、プロスポーツを応援し、盛り上げていく意味でも、このような指標はよいと思う。③「富山県内のスポーツ指導者数の推移」については、何といっても指導者が必要であるため、スポーツ指導者数がよいと思う。登録している指導者数ということになるのではないかと思う。④「スポーツ・レクリエーション活動の振興満足度」は、市民の機運を測っていく大きな指標になると思う。

具体性という観点から、いくつか意見を申し上げる。23 ページ政策1施策1「多様な主体がスポーツを楽しむ機会の創出」について、1つ目の「運動・スポーツに親しむ機会の創出」の前に、「運動遊び」や「スポーツ教室」など、具体的なものを書くことで、イメージを膨らませた方がよいと思う。

25 ページ政策3「スポーツ活動を「ささえる」環境」について、従来からスポーツ団体を束ねているのは富山市スポーツ協会であるため、「富山市スポーツ協会と連携し」という文言を追加するとよいと思う。また、富山市を代表するスポーツとして何を挙げるかは人によって異なるかもしれないが、プロスポーツという観点では、野球、バスケ、サッカーがあると思う。県内を見渡せばバドミントンやホッケーなど他にもあると思うが、富山市になじんでいるものとしては、この3つではないかと思う。

施策2「スポーツ活動を支える団体や指導者への支援」についても、富山市スポーツ協会などと連携して進めるということがあると思う。政策4施策1「スポーツを通じた集まる機会創出と交流促進」の2つ目のスポーツ情報については、とやまスポーツ情報ネットワークを活用することを記載したらどうか。経費の面からも、既にあるものを使い、充実させていくことは大切である。

政策4施策2「まちなかのアリーナを拠点とした賑わいの創出」の2つ目にある、イベントの開催に合わせた交流・滞在・消費については、先ほど品川委員からも話があった。ここには、スポーツイベントの主催団体と連携しという記載を入れたらどうか。そのような団体と連携し、市民にも協力いただきながら盛り上げていきたいと考えている。

委員　スポーツについて、運動する子は親が運動を得意であったり、運動に触れる機会や時間が多かったりするほど、子どもが運動の楽しさを感じ、それが自分の力になっていくと思う。また、憧れの選手がいれば、小さい子どもたちは自分もそうなりたいと思う。

小学生よりもさらに小さい子どもが、親子でスポーツに参加できる機会があるとよいと思う。運動に親しむ環境があることによって、一定程度運動に対する力が育ち、友達と同じように遊べる喜びを分かち合える場にも

なると思うため、初心者の親子でも楽しめるスポーツの機会を進めていただければと思う。

委員　　スポーツ協会として参加している立場から申し上げる。全日本バドミントン協会の言葉として「峰高くして、裾広し。裾広くして、峰高し」というものがある。トップ選手に憧れて競技人口が増え、競技人口が増えることで競技力が向上し、人気も高まるという考え方であると思う。

健康寿命という観点からも、スポーツの裾野を広げることが重要であると思う。また、プロスポーツ選手の姿を見て憧れることが、競技人口の拡大や普及促進にもつながるのではないかと思う。そのため、「峰を高く」することと、「裾を広く」することの両方に取り組むことをスポーツ協会としても意識しているところである。

委員　　スポーツを親子でも楽しめるし、スポーツ観戦の会場で子どもが飽きてしまわないような環境を準備するなど、親が楽しむことを支えることも必要だと思う。

委員　　今回、オールスターゲームが開催され、県外からもたくさん来ていたが、スムーズに運営され大きな混乱もなく帰られたとのことで、こうしたノウハウを地域で蓄積していくことも大切であると感じている。

● **全体**

委員　　部会長から、前回の話を踏まえて、少子高齢化対策や結婚支援が前面に出てくる点について、順番を変えてはどうかという話があったと思う。順番を変える場合、どのように変えるのか伺いたい。

委員　　具体的な案があるわけではないが、「結婚・出産・子育て」ではなく、「子育て・出産・結婚」として、子育てが前に来てもよいのではないかというイメージはあった。

委員　　審議会が始まってから問題視しているものは人口減少であり、このことを認識した上で、何とか減少幅を緩やかにし、どこかで回復させていくことになると思う。その中で、効率的な社会を作らなければならないことや、結婚を希望する方の希望が叶えられるような環境整備をしていかなければならないことを、政策として推進していくことになると思う。

結婚することを強制するわけではなく、政策で強制できるものでもない。一方で、結婚したいと希望している若い人が多いという現実に対して、その希望を叶えていくことは、この政策の大事なところであると思う。決して押しつけをしているわけではない。結婚を希望する人が多い中で、環境を整備し、その希望が実現できるようにしていくという意味では、この並びや内容でも、自信を持って進めてよいのではないかと思う。

押し付けているわけではなく、より幸せになることや、それを実現していくことが審議会で議論している内容であると思う。そのため「結婚・出産・子育て」という並びで問題ないのではないかと思う。あくまでも個人の意志を尊重しつつ、社会を維持していくという命題に応えていかなくてはいけないと思う。

また、さまざまな施策が展開されているが、できる限り、この施策を採用した根拠を記載していただけると分かりやすいと思う。例えば、こういう姿を目指す施策によって効果が上がっていること、先進自治体で成功例があること、市民から多く求められていることなど、根拠を書き添えていただければわかりやすくなると思う。

委員　結婚などについては、一人一人の価値観や外部環境に関わる部分もあるが、記載内容のワーディングは配慮できていると個人的には思う。

本日のテーマとは少し異なるが、コンパクトシティからスマートシティに関連して発言したい。富山市としてどうすればよいか、明確な解決策を持ち合わせているわけではなく、自分でも具体的なソリューションがあるとは思っていないため、発言しづらいところがあった。

一昨日、裾野市に整備されているウーブン・シティを初めて見学した。まさに富山市長が言われているコンパクトシティ、スマートシティとはこういうことではないかと思った。

例えば、個人を特定できない形でセンサーカメラを多数設置し、住民の協力を得ながら、AIが人の行動特性などを分析し、先回りした提案を行うようなまちづくりの実証が行われていた。また、自動運転の実証実験も行われており、まち全体でさまざまな実証が進められていた。

コンパクトシティとしてまちなかに人や企業が集まり、スマートシティとしてICTやAIを活用して暮らしに必要な機能を向上させる取組であり、富山市が目指すコンパクトシティからスマートシティへを、まさに実践しているのがウーブン・シティのようなものではないかと思った。

委員　スポーツ活動について、一般的には健康や体力、技能の向上という面が想起されると思うが、実は脳の発達にも重要であり、脳の発達には運動が重要であるという研究もある。運動によってドーパミンも出て、意欲も高まるとされている。

また、スポーツによる非認知能力の向上、例えば人と付き合う力や、困難を乗り越える力を身につけることについても、2000 年にノーベル経済学賞を受賞したヘックマン教授の研究などがある。ここにすべてを書くわけにはいかないかもしれないが、根拠をしっかり持っていれば、力強くアピールしていけるのではないかと思う。

先ほど根拠や成果が出ていることについての話があったが、そうした根拠はあるということを、事務局としても整理しておいた方が良いと思う。

委員　　非認知能力として、困難を乗り越える力や社会性、調整能力のようなものも含めて考えるという意見であったと思う。そうした点も踏まえる必要があると思う。

（以上）